

真知子

放浪記

凡

蟹工船

浅草紅団

風博士

日本の近代小説II

作品論の現在

三好行雄編

東京大学出版会

日本の近代小説 II

品論の現在

三好行雄編

東京大学出版会

編者略歴

1926年 福岡県に生れる

1950年 東京大学文学部国文学科卒業

1972年 東京大学文学部教授

現 在 東京大学名誉教授，大妻女子大学文学部教授

主要著書

「作品論の試み」(1967年，至文堂)

「日本の近代文学」(1972年，筑書房)

「日本文学の近代と反近代」(1972年，東京大学出版会)

「芥川龍之介論」(1976年，筑摩書房)

「鷗外と漱石——明治のエートス」(1983年，力富書房)

「島崎藤村論」(1984年，筑摩書房)

現住所

東京都杉並区本天沼 2-42-5

日本の近代小説 II

1986年7月10日 初 版

[検印廃止]

編 者 みよしゆき お
三好行雄◎

発行所 財団法人 東京大学出版会

代 表 者 田中英夫

113 東京都文京区本郷 7-3-1 東大構内

電話 (811) 8814・振替東京 6-59964

印刷所 株式会社理想社印刷所

製本所 島崎製本所

ISBN 4-13-083017-1

83179

日本の近代小説Ⅱ
目次

冬の蠅 [梶井基次郎]

小野 隆 1

真知子 [野上弥生子]

根岸泰子 16

放浪記 (第一部) [林芙美子]

藤澤るり 32

卍 [谷崎潤一郎]

前田久徳 51

蟹工船 [小林多喜二]

国岡彬一 68

浅草紅団 [川端康成]

吉田凜生 83

風博士 [坂口安吾]

鳥居邦朗 97

夜明け前 [島崎藤村]

岩見照代 113

家族会議 [横光利一]

樫原 修 129

故旧忘れ得べき [高見順]

関谷 一郎 150

普 賢 [石川淳]

満田郁夫 171

さざなみ軍記〔井伏鱒二〕

羽鳥徹哉

186

風立ちぬ〔堀辰雄〕

藤澤成光

203

ダス・ゲマイネ〔太宰治〕

渡部芳紀

224

瀬東綺譚〔永井荷風〕

柘植光彦

246

母子叙情〔岡本かの子〕

杉井和子

265

歌のわかれ〔中野重治〕

高橋博史

282

連環記〔幸田露伴〕

登尾 豊

304

花ざかりの森〔三島由紀夫〕

白石喜彦

319

李 陵〔中島敦〕

重岡 徹

337

あとがき

355

I 卷 目 次

作品論をめぐる断章―序に代えて

三好行雄

吾輩は猫である〔夏目漱石〕

大野淳一

当世書生気質〔坪内逍遙〕

山田有策

和解〔志賀直哉〕

西垣 勤

浮雲〔二葉亭四迷〕

高田知波

或る女〔有島武郎〕

田中榮一

舞姫〔森鷗外〕

助川徳是

幼年時代〔室生犀星〕

宮澤賢治

三人妻〔尾崎紅葉〕

前田 愛

蔵の中〔宇野浩二〕

野山嘉正

にぎりえ〔樋口一葉〕

石丸晶子

田園の憂鬱〔佐藤春夫〕

林 廣 親

不如帰〔徳富蘆花〕

滝藤満義

伸 子〔宮本百合子〕

吉川豊子

高野聖〔泉鏡花〕

松原康子

銀河鉄道の夜〔宮沢賢治〕

大塚常樹

*

玄鶴山房〔芥川龍之介〕

鈴木秀子

冬の蠅

〔梶井基次郎〕

小野 隆

①初出『創作月刊』（昭3：5）。②初刊『檸檬』武蔵野書院昭6：5。③テキスト 筑摩書房版全集第一卷（昭41：4）所収本文。

私小説の常であると言えばそれまでだろうが、梶井作品のストオリイにスリルやサスペンスを期待してはいけない。梶井作品にだって丸善の棚に爆発するはずの檸檬を置いてくる程度のスリルやサスペンスはある。だが、たとえば、芥川は「羅生門」で、いかに下人の心理を描くことにメインテーマを据えようが、下人が老婆につきつけた刀をどうするのだろうかという読者の疑問に答えようとする。しかし梶井は檸檬を置いて丸善を去った後、その檸檬がどうなったかとか、〈私〉が店員にどう扱われたかなどのストオリイ展開に責任を持つとうとしない。梶井は「檸檬」に関して言えば、へえたいの知れない不吉な塊の行方を、一般論として言えば、想像の世界に入った自己を描こうとしているのである。

「冬の蠅」は数行の序的部分と、1、2及び3からなる。序の部分は二つのことを語る。まず作品における〈冬の蠅〉の意味である。蠅は夏には〈汚い臍物で張切つてゐた腹〉を持ち、〈不逞さや憎々しいほどのすばし

こさ」があった。そしてこれが「冬」という限定をとりさつた蠅の本来だろう。生の充満した状態であり、それに対する病者梶井の嫌悪が感じられよう。だが作品現在には冬である。蠅は「よぼよぼと歩」き、「いぢけ衰へた姿で匍つてゐる」が、「やはり飛ぶ」という。すでに夏の、あるいは本来の生の充満は失われていても、作品中の言葉を先取りして言えば、「生きんとする意志」のみの存在となつて生きていると言えよう。これが梶井の示した冬の蠅である。次に梶井は、蠅を描くのを目的としないことを語る。「私はいま、この冬の私の部屋に棲んでゐた彼等から一篇の小説を書かうとしてゐる」というのはそのことを示している。「彼らを一篇の小説に書く」のではなく「彼らから一篇の小説を書く」のである。よぼよぼの蠅に触発されて書く小説は何か。梶井の健康状態を知る読者には、すでに主人公も予想されている。

日表の倦怠——1について

序的部分で「一篇の小説を書かうとしてゐる」のだから、まだ小説は始まつておらず、したがって「私」として語っていたのは作者梶井のはずである。少くとも、そうした印象を与えようとしていた。1に移り、同じく「私」が語り続けることによって、作者はそのまま主人公「語り手の位置に直ろうとする。また、「小説」ではないはずの序的部分で説明した蠅がほぼそのままのものとして登場することによって、小説として書かれているはずの1以下もほぼ梶井の体験したままとしての印象を与えるのに効果を發揮している（事実としての肺結核療養のため伊豆湯ヶ島湯川屋滞在はあるが、大谷晃一「評伝 梶井基次郎」河出書房新社昭53）は夜の山中に自己を遺棄するのは事実通りでないとする。本稿は事実の穿鑿を目的としない」。

1で語られるのは、太陽に対する蠅と「私」であるというのは一応の見方であるが、その裏面の「酷寒の中の自由」への憧れと対にしてみなければなるまい。まず表から、「彼等（蠅—引用者注）は日なたのなかへ下り

て来るやよみがへつたやうに活気づく、〈彼等がどんなに日光を怡しんでゐるかが憐れなほど理解される〉。〈何といふ「生きんとする意志」であらう！ 彼等は日光のなかでは交尾することを忘れない。恐らく枯死からはさう遠くない彼等が！〉、序的部分で説明された蠅に、太陽とのかわりと、〈生きんとする意志〉が追加説明されたわけである。この追加は大きい。太陽とは熱源として冬に弱い蠅を活性化するものと見ていいだろう。だが梶井は冬の太陽が蠅を生かしきれない、そして生かすかのように蠅を〈偽瞞〉すると見る。〈活気づき、日光を怡しんでゐる〉蠅とは正に〈偽瞞〉の中にいるのである。そして〈偽瞞〉の中にいるが故に〈生きんとする意志〉を持ち得るのである。この意志は強く、そしてせつないまでである。牛乳壺の中に落ち、〈壺の内側を身体に附著した牛乳を引き摺りながらのぼつて来るのであるが、力のない彼等はどうしても途中で落ちてしまふ〉、しかし〈永久に登つては落ち、登つては落ちてゐる〉のである。ここでは〈生きんとする意志〉は無効の行為をするまでである。〈偽瞞〉の中にあるが故に行爲しうると言つてもよいだろう。

彼らがこの偽瞞に乗るのはなぜか。〈私〉は〈恐らく枯死からはさう遠くない彼等が！〉と言うが、実は恐らく枯死からさう遠くない彼等ゆえに「なのである。枯死からさう遠くないゆえに、〈忙がしく飛び交う〉虻や蜂、空に〈流れてゆく〉糸に乗る蜘蛛、〈微粒子のやうな羽虫〉が〈潑刺と飛び廻つてゐる外気のなかへも決して飛び立たう〉とはしない。虻、蜂、蜘蛛、羽虫と蠅はどう異なるか。梶井は蠅の意味づけのために、明瞭な比較を意図していたのである。室外と室内、活潑と不活潑、日光の影響ないもの（羽虫には、〈そこへ日が当つた〉のであって、羽虫が日光を求めたとはしていない）とあるもの、交尾しないもの（実は日記草稿時には、羽虫も〈恐らくは交尾をするために〉とあり、蠅との比較が明確でなかったのであるが、前記〈そこへ日が当つた〉に改められた——おそらく蠅との比較を明らかにする意図で）と、するものである。まとめて言えば、活潑な生の中にあるゆえに太陽光を無視し、したがって〈生きんとする意志〉すら持つ必要のないも

のと、枯死が近いゆえに、〈生きんとする意志〉によって、長らうための熱源日光を求め、生の証しの交尾をするものである。梶井は、日光が蠅をそうした存在としてしか生かさなないことを、〈偽瞞〉という言葉で示している。しかし、蠅は、日光がたとえ結果的に〈偽瞞〉するものであるうとも、〈生きんとする意志〉を向けるのである。

もう一つの要素である〈私〉は、すでに蠅以前に、1の冒頭で〈冬が来て私は日光浴をやりはじめた〉とある。当時の常識から、すでに肺結核患者の療養を思わせる。今さら当時の肺結核が不治の病であったことは言うまでもあるまい。化学療法も外科手術もおぼつかなかった時代、日光浴は栄養補給とともに、結核患者の、治癒の望みは薄いながらも、生きながらえる重要な方法と思われていたのである。蠅と同じく、太陽の偽瞞に乗って〈生きんとする意志〉の行為をしていることは明らかである。しかも蠅は〈病人である私を模ねてゐる〉。蠅は〈私〉を同類とみなしているのである。しかし梶井は、この引用直前に〈なぜか〉を置き、しかも〈恐らく枯死からはさう遠くない彼らが！〉という。〈私〉の意識が現病状及び〈生きんとする意志〉を認識していない、あるいは認識しまいとしていることを示そうとしていると言えよう。

こうした無意識の〈生きんとする意志〉の実行は、それが無効ゆえに〈倦怠〉と〈疲労〉をまねくことになる。しかし、それゆえに次の問題である太陽が考察されるのである。

〈倦怠〉と〈疲労〉は、〈太陽を憎むことばかり考え〉させる。〈結局は私を生かさないであらう太陽。しかもうつとりとした生の幻影で私を瞞さうとする太陽〉だからである。この時、〈私〉ははつきりと蠅と同等に扱われていることを自覚したはずである。太陽は偽瞞する。陽のあたたか風景が〈幸福な感情〉を象徴するほどに。しかし、たとえば杉林は本来〈はつきりした遠近にわかれて〉おり、〈一本一本の木が犯し難い威厳をあらはし〉へしんと立ち並び、立ち静まつてゐるが、昼間直射日光が当たっている時は、雑然とした堆積

であり、へ白く粉を吹いたやうに疲れて、周囲の色との正しい諧調を破らせ、日蔭は日表との対照で闇のようになり、雑多な濁濁となるという。そしてへそこには感情の弛緩があり、神経の鈍麻があり、理性の偽瞞がある。これがその象徴する幸福の内容である」という。ここまで偽瞞として見抜いているならば、へ私」が太陽の与える幸福をへ偽瞞」として拒絶し、太陽を憎むのは当然である。へ平俗な日なた奴！ 早く消えろ。いくら貴様が風景に愛情を与へ、冬の蠅を活気づけても、俺を愚昧化することだけは出来ぬわい。俺は貴様の弟子の外光派に唾をひっかける。俺は今度会つたら医者に抗議を申込んでやる」ということになる。少々ハツ当りぎみの感があるが、へ医者」に云々」は日記草稿にはなく、推敲の結果加えられたものである。医者のすすめる日光浴が、太陽の偽瞞に乗ることしか意味しないことを憎むのである。自己にとっての日光浴が決定的に否定されたわけである。ここに1のへ私」とへ太陽」とへ蠅」の嫌悪すべき状況を否定し去り、新たにへ私を殺すであらう酷寒のなかの自由」という価値観をへひたすら」求めることになる。風景としてとらえれば、へ幸福ではないにしてもへ私の眼を澄ませ心を透き徹らせる風景」である。1の重要な裏とはこれをさす。

だが、1においては、観念的に太陽を否定し、へ幸福でないにしてもへ私の眼を澄ませ心を透き徹らせる風景」を求めても、実際は、私の部屋の夜がおとずれる。梶井は、この夜を（私との同質性を主張する蠅が）へみな天井に貼りついてゐた。凝つと、死んだやうに貼りついてゐたへそれはほんたうに死んだやうであるへ（傍点原文）という。正に死の夜である。そうしたへ夜が更けるにしたがつてなんとなく廃墟に宿つてゐるやうな心持を誘ふのである。その廃墟にへ澄み透つた湯を溢れさせてゐる溪傍の浴槽」を思いうかべ、へその情景はますます私に廃墟の気持を募らせて行く」という。廃墟の湯はいかに豊かと言おうとも無効であることに変わりはない。それは冬の蠅、あるいはへ私」のへ生きんとする意志」にとつての日光浴の無効性に似ている。

だが、病氣から脱することが不可能で、しかもへ生きんとする意志」を持ち続けるならば、ここから生まれ

る〈倦怠、なんといふ因循〉は避け得ない。したがって〈私の病體は、恐らく他所の部屋には棲んでゐない冬の蠅をさへ棲ませ〉ることになるのである。こうした病體にせめられて、眠れない時、〈私〉は〈軍艦の進水式を想ひ浮べる〉という。これは蠅にとっては虹や蜂の世界、すなわち死を思わせない、正に行動に入ろうとする世界、私にとっては病氣とは無関係の世界である。次の〈小倉百人一首を一首宛思ひ出してはその意味を考へる〉のは、単に疲労を呼ぶだけの行為かも知れないが、あるいは競技カルタとして、意味的には死んだものに生を与えんとする行為ともとれよう。また最後の〈考へ得られる限りの残酷な自殺の方法を空想〉するのは、〈生きんとする意志〉の否定を想うことであり、〈私を殺すであらう酷寒のなかの自由〉に通ずる空想である。いずれにしても、〈天井に彼等の貼りついてゐる、死んだやうに凝つと貼りついてゐる一室〉にいたまま、すなわち〈生きんとする意志〉で〈感情の弛緩があり、神経の鈍麻があり、理性の偽瞞がある〉〈幸福〉の中になんの行為もせず、〈酷寒のなかの自由〉を願っているのである。これではへ一体かうしたことに覺がつくはずはない。矛盾のただ中に眠る状態で1は終る。

闇の絶望——2について

郵便局からの帰りに〈乗合自動車〉に乗ってしまう。誤解してはいけない。徒歩で帰るべきところをバスを使ったというのではない。〈疲れてゐた〉ので〈それから溪へ下りてまだ三四丁も歩かなければならない私の宿へ帰るのがいかにも億劫であつた〉から〈不意〉に乗つたのである。たつたの三四丁を〈へまだ三四丁も〉と言いつつながら、後で数里歩くやうに自分をしむけるのは、この疲労の語意が、ほとんど肉体的意味ではないこと、また避けられているのは、歩きではなく宿の部屋であることがわかう。車中の〈私〉は〈不似合な客〉であつた。〈乗客の眼がみな一様に前方を見詰め〉〈泥除けそれからステツプの上へまで溢れた荷物を麻縄が車

体へ縛りつけ」へ半島の南端の港へ十一里の道をゆく自動車」つまり、生活者の乗る車だったのである。1に返って言えば、あたかも潑刺とした虹や蜂の中に「生きんとする意志」だけの蠅がまぎれ込んだような異質性があったはずである。不似合と言うべき存在であった。このバス行はたちまち効果をあらわす。疲労をまぎらす「動揺」の中で、見知った村人とすれ違うたびに、つまり宿のある村を遠ざかることを意識するたびに「意志の中ぶらり」に興味を覚えて来た」という。自己の意識を眺める目が指摘できるが、ここではおく。「意志」はたとえば「生きんとする意志」の「意志」である。それが「中ぶらり」であるとは「生きんとする」から離れた状態である。したがって「生きんとする意志」ゆえにもっていた疲労は、へなにか変つた他のものに変へ」られてしまう。「生きんとする意志」にふさわしい部屋を脱しているのであるから当然の「意志の中ぶらり」と言えよう。倦怠・疲労からの解放を予想させる。「やがてその村人にも会はなくつた」時「落日があらはれた」。直射光線は回折光線に変わり、「私の眼を澄ませ心を透き徹らせる風景が」あらわれるはずである。「年古りた杉の柱廊」はそうしたものと映つたろうし、「冷い山気」は宿の部屋ではないことを感じさせただろう。したがって「魔女の跨つた箒のやうに、自動車は私を高い空へ運んだ」という解放感を得るのである。しかし、解放はそれでも不充分だったのである。「私」は「私の村へ帰るにも次の温泉へ行くにも三里の下り道」の「人里離れた山中」へ自分を遺棄する。理由は「私の疲労が知つてゐる」という。言うまでもない。病者である「私」に、「生きんとする意志」を決定的に放棄させる行為、したがって「疲労」からの脱出の行為だったのである。そこには「私は臍甲斐ない一人の私を、人里離れた山中へ遺棄してしまつたことに、気味のいい嘲笑を感じてゐた」と、決断する自己を外から見る眼をも示している。ここには、疲労からの脱出と、病者にとっては遭難とまで呼べるほどの危険が予想されている。そしてまず「このままで日が暮れてしまつてはと、私の心は心細さで一杯であつた」と、危険の方を心配する。つまりは「生きんとする意志」の抬頭

がある。だが、日没後の静けさに領された〈夢のやうな〉谿に感動し、△「此処でこのまま日の暮れるまで坐つてゐるといふことは、何といふ豪奢な心細さだらう」と私は思つた。疲労を解く夕景にひたる豪奢な気分と、危険を感じる心細さの同居であるが、重点は豪奢にある。危険を冒すことこそが〈生きんとする意志〉の放棄＝疲労脱出なのだから。こうした状態を得た行為は、〈私〉にとって正解だったのだらうか。一まずの答として、いつもの夕餉の時刻を思いうかべる。発熱し、〈悪寒に慄へながら私の頭は何度も浴槽を想像する。〉〈私はぶくぶくと沈んでしまひ、浴槽の底へ溺死体のやうに横はつてしまふ。いつもきまつてその想像である。〉悪寒という肉体的苦痛が、倦怠に近い意味でとらえられている。浴槽は悪寒ゆえに求められた温熱以上に、溺死によって決定的に現在を脱出させる夢を与えるものになっていたと言えよう。そうした状態と部屋が結びついた時、まさに〈私の置き去りにして来た憂鬱な部屋〉という言い方は成り立ち、〈豪奢な心細さ〉を得たのは正解であつたと言える。

やがて、〈あたりはだんだん暗くなつて来た。日の落ちたあとの水のやうな光を残して、冴えざえとした星が澄んだ空にあらはれて来た。〉この作品の、風景に対する美意識からすれば、ますます豪奢な眺めと言えるはずである。だが、〈私〉はここで満足にひたろうとしない。〈暗と寒氣〉に勇気づけられ、〈三里の道を歩いて次の温泉までゆくことに自分を予定してゐた。〉〈痺ひしと迫つて来る絶望に似たものはだんだん私の心に残酷な欲望を募らせて行つた〉からである。〈疲労または倦怠〉は、こうして〈残酷な欲望〉という〈全く異つた感情〉になつた。この〈残酷な欲望〉とは、現在おかれている絶望的状况の中で、自己の〈生きんとする意志〉を無視する方向に向けられたものである。もちろん前出の〈私を殺すであらう酷寒の中の自由〉の類を求めて、ここでは〈私は山の凍てついた空氣のなかを暗をわけて歩き出した〉のである。〈一つの燈火も見えない暗〉の中に入ることを意味していた。そこでは、灯の光との対照でしか闇を理解しない〈文明的〉な把握か

ら離れていた。〈道を見分けてゆく方法は昼間の方法と何の変つたこともなかつた〉ことにも気づく。闇の、〈私〉にとって親しい意味の発見がされ、そこにいる〈私〉は〈倦怠〉から遠退きかけていることを思わせる。そこへ突然自動車を通り過ぎた。ヘッドライトはすでに闇を対照的に把握させる文明の灯ではなかった。ヘッドライトをつけた大きな闇が前へ前へ押し寄せてゆくかのやうに見えるのであつた。闇の二つ目の意味〈大きな〉がとらえられている。〈私〉をつつみ込むのにあまりある闇である。

文明や燈火とは無関係に存在する、そして大きな闇の中に立つた時、闇は〈私〉の心にひきつけられ、〈何といふ苦い絶望した風景であらう。〉〈これは私の心そのままの姿であり、ここにゐて私は日なたのなかで感じるやうな何等の偽瞞をも感じない〉という。〈私の心〉とは何であつたか。それは少くとも、山中に自分を遺棄した時以降は〈生きんとする意志〉を排除する心であつたはずである。そしてこの寒氣をともなつた、しかも次の温泉まで三里の道のりのある闇は、肺患の〈私〉には絶望と呼ぶにふさわしいほど〈生きんとする意志〉を否定していたはずである。それゆえに〈そのなかでこそ私の疲労は快く緊張し新しい戦慄を感じることが出来る〉のである。状況的には求めていたように、あるいは闇の発見が得られたという点ではそれ以上になつたと言えよう。だが、〈私〉は〈生きんとする意志〉を捨てるために、すでに〈残酷な欲望〉をもつていた。〈歩け。歩け。へたばるまで歩け〉〈私は残酷な調子で自分を鞭打つた。歩け。歩け。歩き殺してしまへ。〉ここで注意しておかねばならない。〈私〉は、命すらも危険な状況であるから、一か八かで、とにかく安全な所まで歩こうというのではない。そういう目的地を求めず、病者にとつての〈生きんとする意志〉を真向から否定するための体の酷使、歩きなのである。ここに自己の存在を危険にさらすことによって、ようやく得られる倦怠からの脱出があつたのである。〈残酷な欲望〉と呼ぶにふさわしい意志によってささえられた脱出であつた。

暗中の歩行のまま作品が一旦途切れた時、読者は、〈私〉の倦怠からの脱出と、身の危険を思う。しかし、暗中の歩行は終り、〈その夜晩く私は半島の南端、港の船着場を前にして疲れ切った私の身体を立たせてゐた。私は酒を飲んでゐた。しかし心は沈んだままですこしも酔つてゐなかつた〉と、読者の予想は裏切られる。〈疲れ切つた〉は〈私の身体〉にかかるのだから、三里の道のり（実はそれ以上であることが後にわかる）のもたせられた肉体的疲労であるのと言うまでもないが、倦怠につながる意味もおわせている。なぜならば、酒を求め、しかもそれに酔うことすらもできないのは、暗中歩行がついに満足をもたさなかつたことを暗示しているからである。満足できなかった原因は、〈暗中〉が不十分だったのだろうか。『歩行』が不十分だったのだろうか。敢て選べば『歩行』が不十分だったというべきだが、実は問題はそうした『歩行』では否定しきれなかつた〈生きんとする意志〉の強さにあつた。歩行中を回想して、〈三里はとつくに歩いたと思つてゐるのにいくらしてもおしまひにならなかつた山道〉を行き、やがて提灯の燈に〈温泉はもう真近にちがひないと思ひ込み、元氣を出したのに見事当てがはずれたことや、やつと温泉に着いて凍え疲れた四肢を村人の混み合つてゐる共同湯で温めたときの異様な安堵の感情〉を得たことを語る。〈私〉の『歩行』は、暗中で〈倦怠〉＝〈疲労〉のもとであつた〈生きんとする意志〉を否定するために始められたはずであつたのに、身体の危険から脱するための目的地のある歩行、つまり〈生きんとする意志〉の命ずる歩行に変わつていたのである。それは牛乳壘に落ちた蠅が、〈壘の内側を身体に附著した牛乳を引き摺りながらのぼつて来る〉のと似ているし、〈共同湯で温めたときの異様な安堵の感情〉は、日なたで活気づく蠅を思わせもする。当然〈私の充されない残酷な欲望はもう一度私に夜の道へ出ることを命令したのであつた〉。しかし〈その道でたうとう私は迷つてしまひ、途方に暮れて暗のなかへ蹲まつてゐたとき、晚い自動車が通りかかり、やつとのことでそれを呼びとめて、予定を変へてこの港の町へ来てしまつた〉という。〈生きんとする意志〉を否定するためには〈途方に暮れる〉意